ハンセン病療養所 長島愛生園における気象・天文観測

磯部洋明（京都大学大学院総合生存学館 / 宇宙総合学研究ユニット）

はじめに：ハンセン病について

ハンセン病とは、かつては「らい病」と呼ばれた感染症の一種です。有効な治療薬が普及するまでは不治の病と考えられていたこと、病状が進むと身体や容貌の大きな変化を伴うことなどから、かつては最も恐れられていた病気の一つでした。また遺伝病という誤解もあり、患者本人、そしてその家族までが厳しい差別を受けました。明治から昭和初期にかけて療養所に患者を強制的に隔離する政策が進み、多くの患者は差別が家族にも及ぶことを恐れ、名前を変えて故郷とのつながりを断ち、一生療養所から出られないことを覚悟して入所しました。差別の隔離政策は、戦後まもなく特効薬が普及してハンセン病が治る病気となった後も続き、国の隔離政策を定めた「らい予防法」が廃止されたのはなんと1996年のことでした。ハンセン病が治癒した後も、様々な社会的要因から療養所を出て社会復帰をすることがかなわなかった回復者の方々が大勢います。全国に10数カ所あるハンセン病療養所には、今も回復者の方々が住んでいます。

長島愛生園と入所者の生活

長島愛生園は、岡山県の長島にある国立第一号のハンセン病療養所です。設立は昭和6年(1931年)、最も多い時には2000人超の患者が収容されていました。平成26年7月時点で愛生園に住む回復者の方は237名、平均年齢は83.7才、平均在園年数は59.5年となっています[1]。

療養所では比較的軽症の入所者が、介護、農耕、洗濯などの有償の仕事にあたっていました。「患者作業」と呼ばれるこれらの仕事は、所内にいわば小社会を作って入所者がその中で役割を果たすことによる一種の慰安的要素があったと同時に、入所者を事実上の労働者として極めて低い賃金で働かせるという側面もありました[2]。

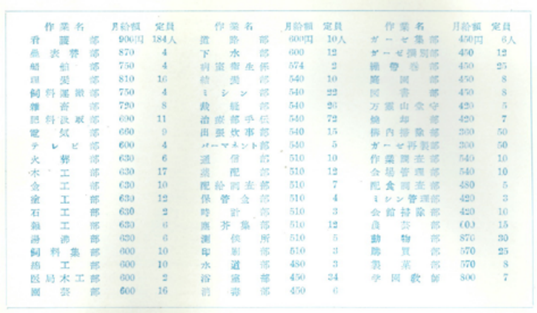
長島愛生園の位置

現在の所内の風景(2014年著者撮影)

右の表は1954年頃の長島愛生園における患者作業の種類とその月給額を示したものです[3]。なお当時の大卒初任給は1万円程度です。この中で定員5名の測候所という作業が、以下に紹介する気象観測所での観測業務に当たります。また文化活動を行う患者の団体も多く作られました。特に長島短歌会の活動は盛んでした。歌集「白描」の冒頭にある、

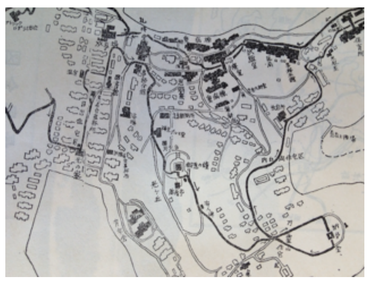
『深海に生きる魚族のように、自らが燃えなければ何処にも光はない』

という有名な言葉を残した歌人の明石海人も、愛生園の入所者でした。



作業名	月給額	定員	作業名	月給額	定員	作業名	月給額	定員
看護部	900円	184人	農業部	600円	10人	ゲーセン部	450円	6人
魚表替部	870	4	下水部	600	12	ゲーセン別部	440	12
蛸船部	750	4	肉類魚部	574	2	機帆船部	450	25
用炭部	810	16	給炭部	540	10	廻園部	450	8
飼料運搬部	750	4	ミシン部	540	22	図書部	450	8
雑香部	720	8	裁縫部	540	28	万葉山登守	420	5
照明技師部	690	11	治療部手伝	540	72	検査部	420	7
電気部	650	9	用器炊事部	540	15	病内掃除部	380	50
テレビ部	600	4	パーマネント部	540	5	ゲーセン別部	380	50
火葬部	630	6	通信部	510	10	作業調査部	540	10
木工部	630	17	農配部	510	12	会場管理部	540	10
金工部	630	10	配給調査部	510	7	配食調査部	480	5
塗工部	630	12	保管金部	510	4	ミシン管理部	420	3
石工部	630	2	時計部	510	3	会館持除部	420	10
鉛工部	630	6	蓮芥集部	510	12	食堂部	400	15
浴湯部	630	6	測候所	510	5	動物部	870	30
飼料集部	600	10	郵便部	510	3	購買部	570	25
馬工部	600	10	水道部	480	3	裏菜部	570	8
医局木工部	600	2	浴場部	450	24	学園教師	800	7
園芸部	600	16	消毒部	450	6			

患者作業の種類



昭和30年代の所内地図
（長島気象十五年報）

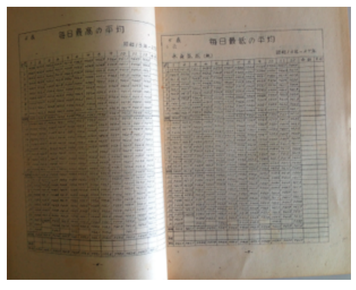
気象観測所

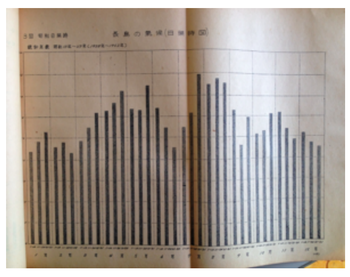
愛生園の気象観測所は昭和10年(1935年)に設置されました。天野鉦太郎さんという入所者が気象に関心を持っていることを知った園が岡山測候所から機材を借りて、気温、気圧、風向、降水等の観測を始めました。天野さんの後をうけて気象観測所の主任を務めた横内武男さんがとりまとめた「長島気象十五年報[4]」には、当時の観測記録の数値やグラフが丁寧な字でびっしりと書き込まれており、当時の観測者たちの熱意をうかがうことができます。実際、長島気象観測所の観測は戦後ずっと後になってアメダスが設置されるまで、岡山測候所の正式な気象データとして使われており、このため気象観測所は何度も表彰を受けています。年報の後記に横内武男主任は以下のような言葉を記しています。

『この書を手にせらるる方々は、その諸表が単なる数字の羅列ではなく、その一つ一つに観測者の命が刻み込まれていることを知って頂きたいのであります。（中略）この書がいささかでも世に益することがあれば私達の病める命を活かし得たことになるのです。』

長島気象観測所（前景）

観測所内部



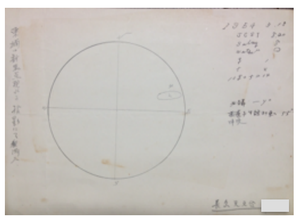


長島天文台と京都大学

昭和24年から30年代前半にかけて、長島気象観測所には天文台がありました。この天文台の建設には二人の天文学者が深く関わっています。一人は京都大学花山天文台の初代台長を務めた山本一清先生、もう一人は彗星観測で知られる倉敷天文台の本田実さんです。戦前から天文学の普及とアマチュア天文家の育成に熱心に取り組んでいた山本先生は、昭和14年に愛生園にて慰問講演を行っており、昭和16年にはニュートン式五吋反射望遠鏡を持参して愛生園を訪問しています。この時の講演をきっかけにして、長島天文台建設の話が持ち上がり、太平洋戦争と戦後の混乱をはさんで昭和24年に長島天文台が竣功しました。

山本先生の遺された資料から、当時愛生園で気象観測を行っていた依田照彦さんという入所者の方からの手紙が残っています。そこには、『今後私はこの島に一生を終わる運命にあり、生をかけてこのこと（天文観測）をやりたい念願です』という天文への思いが述べられています[5]。

長島天文台には山本先生の教え子でもあった本田実氏が指導のためしばしば訪れ、太陽黒点や星の掩蔽観測などが行われていました。これらの観測記録は山本先生残されたの資料から見つかっています。



黒点観測スケッチ

現在の長島天文台跡。
望遠鏡の基礎が残る

気象観測所主任・横内武男さんと歌人・依田照彦さん

2014年に著者らが行った調査で、長島気象十五年報をまとめた気象観測所主任の横内武男さんとは、「天文観測をやりたい」という手紙を送った依田照彦さんの本名であることが分かりました[7]。横内さんは、愛生園の医師と行ったらい性神経痛と気象の関係の研究発表[8]などの気象観測（横内さんの手による天文観測の記録は残念ながら未発見です）に関わる記録には、通称である依田照彦ではなく本名を使っています。その心は推し量るしかありませんが、気象・天文観測に関しては、ご自身の生きた証として本名で残したいと思われたのでしょうか。

一方で横内さんは依田照彦の名で歌人としても活動し、「アララギ」同人として多くの短歌を発表しました。その中には気象観測や天文観測に題を取ったものもあります。

自記気圧線鋭く墜ちぬ刻々の台風来を告ぐる夜更けに

あきらめてゐし眼にかすかに木星の衛星が見ゆるよ一つ二つ三つ四つ

参考文献

[1] 国立療養所長島愛生園HP http://www.nhds.go.jp/~aiseien/nyuukyosyanoseikatsu/index.html
[2] 江藤かおり「ハンセン病療養所における「患者作業」の歴史 : K園を中心として」
人間文化研究 3, 41-51, 2005-03-01
[3] 国立療養所長島愛生園「長島愛生園：写真画報」 1954
[4] 国立療養所長島愛生園「長島気象十五年報」 1955
[5] 冨田良雄「山本天文台モノ資料紹介」
第３回天文台アーカイブプロジェクト報告会議集録 2012
[6] 磯部洋明「宇宙環境とスピリチュアリティ」
スピリチュアリティと環境（鎌田東二編、2013）に集録
[7] 故人である依田さんの本名を記すにあたっては、依田さんを直接知る愛生園の現自治会長にご判断を仰いで了承を頂きました。
[8] 伊藤正保「らい患者の神経痛と気象の関係に関する横内武男君の業績」
長島紀要 (11), 46-49, 1963-03
[9] 依田照彦歌集　長島短歌会